

デキる妹はイヤですか？

小説 089 タロー

挿絵 あここ。



二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



登場人物紹介

Characters



いくしまみのり
育嶋 美野里

新児の義理の妹。他人には優しいが新児にはやや厳しく接する。
恥ずかしがり屋。





いくしま あいみ
育嶋 愛実

新児の義理の妹。天真爛漫
で男女問わず人気者タイプ。
甘えんぼ。



いくしま しんじ
育嶋 新児

美野里と愛実の兄。柔和な顔立
ちに中肉中背の優しい少年。

序章	お兄ちゃんはデキないの!!	007
第一章	お兄ちゃんとデキたいの……っ	022
第二章	お兄ちゃんとデキたいですっ!	060
第三章	お兄ちゃんとデキてるのっ	101
第四章	お兄ちゃんとデキたかったの……	151
第五章	それでもお兄ちゃんとデキたいのっ!	193
終章	お兄ちゃんがデキちゃったっ(喜)	248

眼前が暗くなり、カツンと前歯が硬いものに当たる。そして次の瞬間には、濡れたような柔らかな肉質に唇をプツチュリと押さえられていた。

(み、美野里が……キスを!? ああつでも、柔らかくつて、プニプニしてて……!)

慣れてないのは一目瞭然。だから前歯同士をぶつけてしまったのだ。しかし身を乗り出した彼女は唇を重ねると、懸命にキスを続けてくる。

——ちゅっつ。ちゅちゅつ、むつ、ちゅぷうう……つ。

「ん、ちゆる……んふう、ぷちゅつ、んんっつ……!」

「ちゅうう、つつ。んんあ、美野里つ、ああ、こんな……」

まさに感極まったところか。彼女のキスは決して上手とは言えないが、それでも何とか想い人を振り向かせようと幾度も幾度も唇を吸ってくる。

すでに息は荒く、満足に呼吸もできなかつたのが分かる。しかし、唾液で濡れた唇はルージュのようにつやめき、途方もなく色っぽい。

「ゴクつ。はあ、はあ、美野里……こんな、初めてのキスを?」

ただの当てずっぽうだが、たぶんそうだろう。むしろ違っていたほうが恨めしい。

「はあ、はあつ、は、はい……初めては、兄さまだって、決めてましたから……」

肯定する義妹の頬は、すでにたつぷりの濃厚桃色。見つめる瞳は涙が光り、健気であると同時に強い情愛が浮かぶ。

まさに、意中の男子を振り向かせようと必死にアピールしてくる純情美少女という姿。

そんな桃色美少女は、少年に対して精一杯に求愛する。

「はあ、はあ……で、ですから、わたしにも……兄さまのお子種を、くださいっつ」

（こ、子種ってっ！ やっぱり美野里、本気なんだ……）

単なる恋愛だけならここまで言わないだろう。誰だって青春時代の甘酸っぱい恋くらいは夢みるだろうから。

しかし彼女は、後へは引けないほど深い関係を迫っているのだ。

「どうか、お願いします。わたしを……兄さまの女にしてくださいっ。ん、ちゅぷ……っ」

一度勢いに乗ったせいか、美野里はさらなる口づけに没頭してくる。今度は軽く開いて唾液を塗しながら。

（ううっ？ や、柔らかいのがっ！）

物すごい柔らかさに、口の性感帯が優しく吸引される。するとゾクリとするような恍惚刺激。

それは、愛実とも経験がないほど濃密なキス。まるで唾液を交換するように口先を開けては、上下の唇を交互に吸いあう。この熱烈な求愛に少年の男心はグラグラと揺すられる。（す、すごいっ！ キスだけで、こんなに気持ちよくなれるなんて！ 女の子のツバが、こんなに美味しいなんて！）

舐める舌先から唾液が流しこまれ、自分の唾液と混ざり合うと、口内を痺れさせるように広がる甘味。それは少しずつ喉も痺れさせ、後頭部をフワフワと脱力させていく。

——はあ、はあ、ちゆるつ、れる、ぺろぺろぴちゆりつつ……。

なおも続くディープなキスで、次々と理性が麻痺していく。歯先まで舐められて、鳥肌が立つような興奮。

すると目の前の義妹が堪らなくいやらしく思えてきて。

「べちゆつ、んっ!? あはあ、に、兄さまあ……む、胸がああ……っ」

「はあ、美野里、す……好きだ、美野里いっつつ」

スルツ……もみっ。ふわっ、もみっ……。

新児の両手が義妹の肩にかかり、滑り下りながら乳房を包みこんでいく。四つんばいで身を乗り出す少女は、初めての乳触に当惑させられる。

だが義兄少年はもう、彼女を『女』としてしか見えなくなっていた。これだけ進んで舌を絡ませ、『孕ませて欲しい』とまで迫られれば、密かな恋慕を暴かれずにはいられない。(ああ、そうだ。僕は美野里だつて大好きなんだ。ずっと前から好きで……抱きしめたいつて思ってたんだ！)

すでに愛実を抱いてしまっているためか、一度自覚すると後は流されるばかりだった。ピンク色の女の子らしいキャミワンピを、ゆつくりと脱がせにかかってしまう。

細い肩紐のスラリとした寝間着。色合いといい長めの丈といい、甘やかで慎み深さもあ、愛らしさといじらしさを兼ね備えた美薄着である。その肩紐をそつと下げると、滑らかな胸元が顕になつていき——ぶるっつ、むにっ。

「んああ、に、兄さま……は、恥ずかしい、つつ」

「そんなことないよ。美野里のおっぱい、すごく綺麗だよ……」

そつと顔を覗かせた胸は、優しい膨らみのDカップ。ちょうど掌に収まるそのサイズは、白くきめ細やかでいかにも触り心地がよさそう。綺麗な丸みの先端には小さなポッチが浮かんでいて、まるで桜色の小豆みたいにか愛らしかった。

しかも、ゆつくりと脇から寄せていくと柔らかく形を変えていき、ふにゆりとした触感に堪らなくドキドキさせられる。

「あああ、兄さま。兄さまあ……ん、れちゅつつつ」

むにゅつ、むにゆりつ。ふにむにつ、ぷりんつつつ。

まるで餅のような柔らかい果実を、少年の掌がじつくりと楽しんでいく。時折尖った先つぽを転がすと、唇触少女はピクン！ピクン！と震えてみせる。

「つつああ、はあ、はあつ、に、兄さまあ、わたし、むっ胸が……き、気持ちよく……」

義兄の愛撫によつて、美妹は確実に性感を目覚めさせられるようだった。目尻はトロンと蕩け始め、赤い頬には汗の玉が浮かぶ。唾液に濡れた唇は、今や雄のディープリキスをうつつりと受け入れている。

そして——彼女が感じてしまっているのを、はつきりと認識できる他人がそこにはいた。

「お姉ちゃん、ぱんつ、濡れてるよ？ お姉ちゃんも気持ちいいんだ？」

「んつつつ！ そ、それ、は……」

実の妹に指摘されて、羞恥の動揺を見せる美野里。腰をくねらせて隠そうとするも、一人残された愛実には、外側からしつかりと視認することができた。

「ほら、お姉ちゃんのアソコ、おツユ出てるんだ？ 分かるよ、愛実もお兄ちゃんとシテると、出てきちゃうもん」

恋人との情事を邪魔されたというのに、愛実は微笑みすら浮かべて見守っていた。無邪気な彼女は、姉が彼を奪い取ることなど考えもしないのだろう。

だからこそ、共に愛でられることを許し、共に少年を高めようとしてくれるのだ。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんのおクチとおっぱい、気持ちいいんだね？ じゃあ、愛実はお兄ちゃんのおちんちん、気持ちよくしてあげるね？」

ちよっただけ悪戯っぽく愛実。豊満な裸身を横合いから寄せてくると、少年の股間に片手を滑りこませてくる。

「あつ、愛実？ ううつ、あああつ」

キユっつ。すりっ、スリスリにちゅりっつ。

暖かい掌が勃起肉を柔握り、緩やかに上下し始める。途端に股間を微弱な痺れが走りだし、むき出しの亀頭がみるみる敏感にされていく。

「んふっ、ちゅうううう、っつはああっつ。こ、これが、兄さまのおペニス……！ お、大きいっつ」

布団から取り出されたことで、一糸まとわぬ兄裸体が顕になった。そして股間で漲るソ

レを見た美野里は、その太長い立派さに圧倒されてしまう。

掌全体を使ってやっと握りこめるくらいの径。ヘソまで届きそうなほどの全長。そして完全にムケきつた包皮とカリは、処女を絶句させるには十分すぎるシンボルだった。

「うん。お兄ちゃんのおちんちん、おつきいよね？ でもね、こうしてあげると、すごく悦んでくれるんだよ？」

そう言う愛実は、もう慣れてきたのか、太いサオを慈しむように丁寧にしごいていく。その温かさとし心地よい性感によつて、兄勃起はビクビクと力を増していく。

「ああ、愛実っ。そう、そこ……カサのところ、気持ちいいんだ……」
「んっ、ここだね？ 任せてお兄ちゃん。いっぱいシゴいてあげるね」

要望に応える指が、さらに優しく丁寧に刺激してくる。根元から中腹へと移すと、ゆつくりと時間をかけて動かしていく。そしてエラの裏側に指で触れると、コチョコチョと甘撫でてくれた。

「あっ、ああっ！ いいよ、それ。すごく、気持ちいいっ」

少し楽しそうな愛実は、すでにセックスに慣れてきた子悪魔な感がある。恋人の悦びを自分のもののできるかのよう。対する新児はじつくりと高められて、ますます女肉の虜にされてしまう。

だが、実妹が義兄を悦ばせられることを知った美野里は、少しでも対抗心が生まれたのか、自ら進んで乳房を揉ませてくれ始めた。

「はああつ。兄さまっ、わたしの胸、もつと……触ってください。兄さまに触られてわたし、幸せなんです……っつっ！」

むにりっつ、と乙女掌が上から重なり、少年の揉み手をいつそう強く後押ししてくる。小さな可愛らしい乳首がこりりっ、とくすぐり、柔らかDカップが雄の情欲を沸々と煽あほつてくる。

それはそれで大変気持ちいい。だが、勃起少年は主張の強い豊満臀部にも興味が湧いてしまい、抱きしめるようにヒップに手を伸ばした。

ぴとっつ。すりっ、さわさわもみゆりっつ。

「ああつ!! に、兄さまそこはっつ!!」

「ご、ごめん。でも美野里のお尻、大きくてすごく気になってたから」

そう。ずつと意識していた。安定感のある優しくもモッチリした彼女のヒップを。

いつか……触ってみたいと思っていた。思うまま触ってみたいと思っていた。そしてそれを実践してみると、可愛い義妹はギュッと目をつむって喘いでくれた。

「あんっ!! そつ、そこ……っ。兄さまの手、い、いやらしくうっつっ!!」

ショーツに包まれたヒップは、しつとりと湿り気を帯びている。それが汗なのか何なのかは分からないが、そつと指腹を滑らせると、心地よいヌルつきが堪らなく興奮剤になってくれた。

「美野里、濡れてる。気持ちよくなって、欲しくなってるんだね？ 僕もこのお尻、すごく

大好きだよ」

「あああそんなっ！ だからって、そんなに優しくされると……わたし、ドキドキしてしまえますうっつ」

少年の手つきは優しく、往復と円運動をヌルヌルと何度も繰り返す。可愛い純白ショーツがシワになり、徐々に生尻を顕にしていく。

彼女のお尻は、やはりふっくらとした肉づきの安産型だった。優しく滑らかな曲線は女性のお尻のふくよかさを存分に表し、触れば柔巨乳のようにぷるん、たぶんっ、と扇情感たっぷり揺れ動いてくれる。

だから義兄少年は、両掌いっぱい包みこむと、じっくりといやらしく揉み味わっているのだ。

「っはあ、はああ、さ、触られてる、触られてますっ。兄さまに初めてのお尻、たくさん……んああっつ」

（か、可愛い……美野里、お尻触られて、真っ赤になってすごく興奮してるっ）

まるで痴漢して女性を悶えさせているような倒錯感。恋慕ゆえに抵抗できない美少女を、じっくりと開発して自分のものにしていくよう。

しかも股間では、もう一人の愛妹に、丁寧にペニスを擦られているのだ。興奮と性感に高まったソレは、すでに妹膣を味わう準備を完了させている。

「美野里、僕、そろそろ……」

「は、ああつつ。はい……きて、ください……つつ」

十分に高まったのは彼女も同じで、義兄の手を離れると、自ら濡れショーツを脱ぎ去っていく。

そして、少年に覆おぼい被おぼさらられて仰向けになると……恥おぼじらう乙女の秘股が、ススウ……と優しく開かれていく。

（あああ、これが……美野里のアソコつつ！ ヒクヒクして、でも、綺麗な蕾みたいで……ステキだ）

まだ開ききらない肉の細筋は、いかにも初々しい純情処女唇。それでも愛雄を受け入れようと、健気に花開く桃色の園は、拒まむ術まなどありえない純情の入り口。

半脱ぎのキャミワンピ、そのスカート代わりの裾をそつとめくり上げると、淡い恥毛に包まれた股丘も顕あにされる。ふつくらとした肉土手は、白磁のように輝きつつも熱感溢れる乙女の裸股。肉づきのよい太腿が開けば中央の肉裂も音もなく開き、朱色の内側をも恥ずかしげに視姦されていく。

たつぷりと育った豊潤なヒップに、白く柔らかそうな乙女の股間。そして今、濡れた処女口に勃起亀頭が優しく添えられ、ぬるつ、と入り口を探りあてられる。

「あああ、ほんとに、いい？ 美野里のバージンもらつても？」

「っはい……兄さまの、女になりたいんです。ですから……お子種、中にください……つつ」
妊娠まではちよつと微妙だが、こうまで本気になってくれることに喜びを感じて、そつ

とくびれを引き寄せていく。

ゆっくりと腰と腰を密着させると、意識して身体を前に動かす。先端だけでなくズブズプと亀頭が入り、美少女の処女が優しく奪われていく。

「あっ、あああああっ!!! にっ、兄さまっ、兄さまのおおお……!!」

狭い入り口付近に、ぶにゅつとした儂い^{はかな}抵抗感。その清い証を肉先いっぱいを感じ取った少年は、甘い優越感にブルルっ! とわななく。

だが、ここまできたら後には引けない。柔肉の抵抗が、少年の情熱でプニっ、ムニっとな押し上げられて……、

——むちいい……つつつびちりつつ!

「あうっ!!! かはあああああ……つつつ!!」

(くっ、入ったっ!)

何かが弾け、さらにヌルリとペニスが入る。抵抗のあつた箇所では、なおも儂い締めつけが残る。

ついに——大切な義妹の処女を、すべて奪い尽くした義兄少年。苦悶に涙ぐむ彼女を抱きしめ、ちゅつと唇を重ねて気遣う。

「っはああ、だ、大丈夫、美野里? やっぱり、痛かった?」

愛実のときとは違い、今度は自分から処女を奪ったのだ。だからこそ、よりいっそう気遣ってあげないといけない。

だが彼女は眉根を寄せて堪えながらも、花のような微笑みを浮かべてくれた。

「だっつ、大丈夫、です。この痛みは、兄さまの女になれた証ですから。一生に一度の経験、兄さまにさしあげられたんですからっつ」

「み、美野里……」

（な、なんて健気で可愛いんだ！ 痛みまで大切にしてくれるなんてっ！）

確かに男と違つてロストバージンの痛みは一度つきりかもしれない。そして、それを捧げた上で、男の子供を身籠もろうというのは、まさに『人生』を預ける覚悟ゆえだろう。

やはり、堪らない。真正正銘、自分の女になりたいと願う美少女義妹が愛おしくて、さらにキスの雨を降らせて腰動かしてしまふ義兄少年の新児。

「ああ美野里、ちゅっちゅぶっつ。はあ、好きだ。大好きだよ！」

「くああ、兄さまああ……！ くふっ、ちゆるうう……っつっ！」

ちゅっちゅっ、じゅぷりっつ、じゅぷりっ……くちゅっ、くちゅっ、じゅぶ……。

慈しむように唇を重ねながら、慣れぬ入り口付近を丁寧に行き来する。そうやって愛妹をいたわり、かつ、ゆっくりと自分のものにしていく。

開いた股間からは朱色が滲み、愛液に混じつて静かにシートに伝い落ちる。狭い膣口からは少しだけ桃色粘膜が顔を出し、硬いサオに慎ましやかに絡みつく。

それはまさに、恋人同士の甘い初夜だった。氣遣う男に優しく押し倒され、重なりあい、抱きしめられながら丁寧な腰振られていく。徐々に二人だけの空気になっていく。



「お姉ちゃんも、やっぱり最初は痛いんだ？」

一人取り残された愛実だったが、必死に義兄を受け止める実姉に怒るつもりはないらしい。蕩けた表情を実姉に近づけて、クスリと微笑みを浮かべた。

「でも、お兄ちゃんのだもん。すぐに気持ちよくなるよ？　だって愛実、お兄ちゃんのおちんちん、大好きになっちゃったもん」

それは——間違いなく姉を思つての言葉だったのだが、言われた当人は、一概にそうとは受け取らなかつたようだった。

「あ、愛実は、んっ、兄さまのコレを、もう何度も……」

実際にはまだ二度だけだったが、経験の差を匂わされた美野里は、どこか火がついたらしく、苦悶を押し殺して腰を動かし始めた。

「あうっ、美野里っっ。そんなに無理して動かなくても……」

「いっ、いいえっ！　兄さまに、気持ちよくなつて欲しいんですっ！　だから、だからあ、っっ！」

最初は手加減した浅い抽送だったが、彼女の動きが加わつたため、次第にねとっ、ふわっつ……と深く包みこまれてくる。そして心地よい痺れがサオを走り、思わず奥を味わいたくなつてしまふ。

「だ、だめだよ、そんなにしたら僕……止まなくなっちゃうよ」

ピリピリとペニスの表面に媚電が生まれ、みるみるうちに敏感になつていく。おかげで

暖かい処女膣をもっともつと触りたくなくて、ついつい腰が前後するのを堪えるのに必死。だが、そんな彼の辛抱勃起を、健気な処女粘膜がぬるりと撫で上げると……びくっ。ビクビクんっつ！

「ううっく！ き、気持ちいいっつ。美野里の中、狭いのには、すごく優しくって……っつ！」
うっかりすれば出してしまいそうなほど。彼女の乙女膣は大変柔らかく弾力があり、まるで最上の柔らかかグミのよう。さらに表面には小さな柔肉粒がちりばめてあり、ヌルヌルなのにざらざらした摩擦感。

蜜壺全体はホクホクと暖かく、切なげにキスしてくる純情媚膣。その甘くて愛情たっぷりの処女肉愛撫には、もう、先端でのソフトキスではなく、腰を入れてのディープキスで応えなくなってしまう。

——っつぷふううっつ。じゅふう、じゅふうっつ！ ぐぶっ、ぢゅぢゅぶ……！！

「あっ、あふうううっつ!! ふっ、ふか、いい……!! 兄さま、兄さまの、おペニスうう……!!」

乙女の膣肉快楽を知っている新兄は、処女の媚粘膜を堪らず楽しんでいってしまおう。そして勢いが増すにつれて、少女の顔からも、次第に苦悶の色が消えていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ、に、兄さまの、おペニス、とつても大きくって……わたし、ああわたし……っ!!」

汗濡れた頬は薔薇色に染まり、瞳が戸惑うように潤み始める。口元は緩み、荒い呼吸が

熱い吐息に変わっていく。

そして何より——ベッドに沈む乙女の股間からはリキミが抜け、もじっ……と焦れるようにくねり振れてくるのだ。

「お姉ちゃん、オシリ、くねくねしてる……お兄ちゃんのおちんちん、気持ちよくなっただね？」

「はあっ、はあっ！　だ、だって、兄さまのおペニス、熱いのに、ビクンビクンって脈打つて……わたし、わたしいっつっ！」

美野里の腰は確実に性感を高められていて、次第に艶かしい円運動へと変わってくる。そして射精欲に漲る男根をきゅ……つと甘搾り、心地よい解放を促していく。

(くうっ!!　すごいっ、気持ちよくなって、ついっ!)

多少慣れたとはいえ、まだ童貞卒ホヤホヤの少年には、乙女の膣肉は堪らない快感。ついつい動きを速めて射精したくなってしまう。

「み、美野里っ！　可愛い、可愛いよっ！」

「はああ!!　に、兄さ……あああっ!!　ひううんっつっ！」

むしろ今度は新児のほうがりキんでしまう。腰に力が入り、深いところまでガッチリと繋がっていく。

——つじゅぶつじゅぶつ、クチュクチュヅルヅリユっつっ!

「はああ、はげしっつっ!　ああ待って、まってください、わたし、わたしいい……!!」

辛そうな声色も鳴りを潜め、甘い響きが混じってくる。ベッドに沈む女体は、小さな汗粒を浮かべてユサユサと前後される。

乙女の本能が刺激されるのか、ツブツブの壁もさらに甘く、優しく締めつけてきた。腰を引くと切なげに吸いついてきて、突き入れると柔らかくに絡みつく。

「んうっ、はううっつ！ ああ、なあ、なに？ なにか、きちやいますっ！ なにか、なにかああ……!!」

今や彼女はまったく股を閉じようとしなない。兄腰にグイグイと突き揺らされても、踵かかとを宙で泳がせながら、ときにはクイツと少年に絡まったりするほど。

汗濡れた生ヒップもいやらしい波紋を刻み、剥かれた美乳もふるん、ふるん、と不規則に揺れては雄の視線を楽しませてしまう。もはや寝間着はシワクチャで、恥裂も乳房もまるで隠しはしなかった。

「はあ、はあ、はあっ！ も、もう止まらないっつ！」

腰打ちがますます加速して、淫らに変貌する美妹を責め立てる。汗が舞い、振り幅が大きくなる。

—— つじゆぶう!! じゆぶじゆぶグチユグチユちゆばんちゆばんっつ!!

「はああつ!? つつはあはあ、だめえ、だめですうう! にい、兄さまあああつつ!!」

優しい義兄の愛欲を受けて、少女も何かが追い詰められていく。吐息は甘く霞み、腰が悩ましくくねる。瞳は宙を彷徨さまよい、どこか夢見る少女のよう。

力いっぱい突きこむ少年も、汗にまみれて熱狂の顔色。勢いよく抽送して恋慕と快楽を貪っていく。

まさに熱気溢れる情事。引き締まった雄腰が白い女体と桃色の肉薔薇を独占していく。
(くっっ!! 止まらない、気持ちよくなって止められないっ!!)

もはや彼女をいたわる余裕もない。生膣の感触をタツプリ味わいながら、ひたすら性感を高めていってしまう義兄少年。

戸惑い揺らぐくびれを掴み、その内側を何度もコスリつけていく。敏感なエラで力強く粒齧を撫で回す。

蜜濡れたサオもグチョグチョと出入りする。さらに、逞しい肉先が蜜壺奥を突き撫でると——ビクウ! ビクぶるるるっ!!

「ひゃあああああうっつ!!! すごっ、そこ!! だ、だめですっ!……もうっ、だめですウウ!!」

長く雄々しい突きこみに全身を震わされる美少女、美野里。ついに乙女の切迫を漏らすと、ギョツと両足で兄腰に絡みついてしまう。同時に中もきゅっ! と締まった。

「いい、いいですウっ! いい、イっちゃいますウ、奥が、奥がああ、つつっ!!」
「うううっつ!! みっ美野里っ! 僕もっ、もう……!」

繊細な膣粘膜にペニスを余すところなく刺激されて、堪えていた瞬間がついに眼前に迫る。カリが気持ちよく麻痺し、風船のように爆ぜる寸前になる。

それでも深く絡み合うと、愛妹は、両足をしっかりと絡ませて最後のおねだりに走った。「きつてくださいっ!!」中に、ナカに兄さまのお子種、注いでくさいいいっつ!!」

美野里の情熱的な懐妊要求。そして温かく締め上げる肉壺。

その乙女心に何もかも奪われて、最後の加速をかける興奮少年。

——パンパンばんばん!　じゅぶじゅぶぢゅううううっつ!!

「っつあああああつ!　イクよ!　中で、美野里の中でイクよおっつ!!」

「っつあああああはいっつ!!　にいさ…:わ、たしいいいいっつ!!」

汗ばむ乳房がぷるんと跳ね、安産型ヒップがぱちんと弾ける。肌はますます朱色に染まり、腰が悩ましい振れを見せた。

可愛いアゴがカクカク揺れて、熱い吐息がハアハアと零れる。美しい乙女顔と極上の粒鬘に酔いしれて、脳裏がチカチカと閃いていく。

そして少年のペニスが根元までむちゅりと埋めこまれると、健気な蜜膣がきゅんきゅんきゅんっ!!　と抱きついてきて——、

「っつあああああああああつっつ!!!　くるっ!!　きますうううウウウウっつ!!!」

少女の肌からパツ、と汗が散り、一度大きくブリッジした。桜色の腰がビリリっ!　と跳ね上がり、乙女の絶頂を知らせてくれる。

と同時に、愛雄の性感もうつとりと限界を迎えた。

「くうううっ!!　もうだめっ!!　出るうううっつっつ!!」

第三章 お兄ちゃんとデキてるのっ

「んうっ、分かる？ 僕のおちんちん、愛実が大好きだって硬くなってるんだよ？」
「う、うんっ。っつはあ、わ、わかる、よおお……お兄ちゃんの、びくって……あ、熱いからあっ」

（つていうか、熱すぎだよおっ。こんなにおちんちんでごしごしされると、愛実い……っ！）
今にもイつてしまいそうだった。スベスベの水着は少年の性器をツルツルと滑らせ、股の恥丘をムニムニと揉みこんでくれる。すると甘い痺れが膣唇を潤して、トロリ……と恥蜜が零れてしまう。

まだ入れられてないのに、下腹部の奥がトクトクと脈打ってくる。そこへ亀頭で撫でられると、ゾクツとするような興奮感覚。今にも入ってきそうな予感と、それを期待してしまっ。もう桃色の飢餓感。

（ああっ！ 愛実、お兄ちゃんのおちんちん、こんなに好きになって……すぐ欲しくなっちゃってるう！）

恋人の抱擁を背中いっぱい受けながら、愛実は幸せともどかしさに苛まれていた。

熱い肉感彼の愛欲を伝えてくるし、硬いサオは挿入意欲を如実に教えてくれる。敏感な乙女股にそんな求愛をされたら、もう、膣奥や肉褰が疼いて疼いて仕方なかった。

彼の腰はゆっくりと前後し、後ろから肉勃起を擦りつけてくる。これを味わわれる乙女の股膣は、雄の愛情でタツブリと潤され、ねっとり門戸を開いていく。さらに背後から密着されれば、熱気吐息に耳朶みみたぶがゾクゾクさせられてしまう。

「んああ、んあああんつつ！ ああ、お、おニイ、ちゃんっ。もう、愛実い……」
(お、おちんちん、欲しい……奥に、ずぼってえつつ)

擦られるたび、膣内の勃起感触が思い起こされていく。あの雄々しい挿入と、心地よい粘膜接触を。

それを分かってもらいたくて、ムチムチしたヒップをプリッ、プリッ、と揺すつてしま
う義妹少女。するとサオが優しくシゴかれ、少年がうつと呻き声を上げた。

「あ、愛実。アソコ、濡れてるよね？ ここ、あつたかくなってるよ？」

「はあ、はあ、お、お兄ちゃんの、イジワルうっ。愛実のおま〇こ、お兄ちゃんが大好き
なコト、知ってるくせにいつっ」

そう。今や彼女は、義兄の身体をも好きになつてしまつていた。彼の太長い性器で深く
繋がつて欲しい。濡れた内側を堪能して、愛の証を思う存分注ぎこんで欲しい。

(そおして……お兄ちゃんの赤ちゃん、いっぱい産んであげたいのつつ!!)

それが彼女の望みだった。しかし今は、それだけでなく、恋人との『子作り』そのもの
にも胸躍らせる自分がいる。

この、純で官能的な乙女心をそつと伝えると……恋人義兄は、微笑んでから、そつと水
着をずらしてくれた。

「分かったよ。愛実のヌレヌレのアソコに、僕のおちんちんで中出ししてあげるからね」
「うつつうんっ。嬉しいっ」

今では『子作り』に逡巡を見せない愛兄、新児。この大好きな恋人に、しつかりと種付けして欲しくて、犬のようにヒップを突き出し、フリフリとおねだりしてしまう淫欲少女。横にずらされた水着の奥には、柔らかく解れた小さな肉の花弁。スマタでネチっこく刺激された秘孔は、すでにコプリと蜜を垂らすほど潤って、生殖準備を完全に整えていた。

「愛実、すぐくエッチだよ。お尻の穴までヒクヒクしてる」
「いやんっ、いわないでええ、つつっ」

近くの尻孔まで見られてしまい、堪らず恥じらう水着少女。少し濃いめの肌色のシワも、なぜか一緒にきゅんきゅんしてしまっている。

それくらい、彼女の豊満な肢体は、雄に抱かれることを望むようになっていた。

そして——見事な生殖器が挿入されていくと、震えそうな甘い肉圧がゆっくりと疼きを満たしてくれて。

——ずぶつつ。にゅぶぶぬるるウウウウつつつ。

「うあああああんっ!! あはあああ……す、すぐ、いい、つつつ! 太くって、硬いよ おおつつ!」

(な、なんなのお!! お兄ちゃんのおちんちんって、こんなに気持ちよかったのおっ!!) 半ばまで入られると、埋められる予感に乙女の飢餓感がドクドクと胸を高鳴らせる。

さらに奥までしつかりと埋められると、今度はうっとりするような満胎感が駆け抜けて、背筋が心地よく痺れきってしまう。

「すう、すご、いいよおお。おニイちゃんの、おナカ、いっぱいにしちゃってえ……っ
っ!!」

まるで全身が軽くなるような快楽だった。羽毛のようにフワフワとして、天に昇っていくような感覚。なのに熱い勃起感覚はしっかりと伝わってきて、乙女の性感をただ一点に集中させていく。

「おあああっつ。あ、愛実いつつ。愛実の中、前よりもつとトロトロになって……っすごい、気持ちいいよっつ!!」

「はあっ、はあっ! あ、愛実もだよお。おニイちゃんのおちんちん、すっごく硬くつて……た、堪らないよおお、っつ!!」

本当に、どうなったのかと思うほどだった。以前も十分気持ちよかったが、今度もつと気持ちいい。

張り詰めた亀頭に膣道をピクピクと圧迫されると、純な性感が悦ばされて、ふわあ……つと根元から包みこんでいく。そして吸いつくような肉粒で、優しく丁寧にソフトキスをしていく。

さらに中間を素早く擦られると、今度は奥が切なくなつて、にゅぷ……つと鬚を絡みつかせてサオ全体に抱きついてしまう。ここでペニスがビクツと震えると、肉の壁は愛しげにきゅっ、きゅっ、と甘くシゴき上げて、雄に愛情をタップリと伝えていく。

これらの動きが、不思議なほど実感できるのだ。おかげで腰はクネクネと悦びくねり、

いやらしく円を描いて誘惑してしまふ。

「愛実のお尻、すぐく揺れてるよ。うつつく、中もトロトロで、溶けちゃいそうだ！」

一方で少年も、愛しい恋人の胎内感触に嬌声を上げ始めた。苦悶のような声を絞り出し、上から背中に覆い被さると、ムチリつ、と爆乳を揉み味わっていく。はち切れそうな乳房が水着越しに踊らされ、ぶるんぶるん！と激しく形を変えられる。

「んふうううんつつ!! あうつ、お、おっぱい、やあああんつ！ 気持ちいいつつ!!」
「あううつ!! そ、そんなに締めないでつ。よ、よすぎるつつ！」

新たな性感に触発されて、濡れた蜜肉がキュツと搾り上げる。締められた男根は膣圧に悶え悦んだ。

自らが開発した媚膣に搦め捕られ、腰震わせる義兄少年。四つんばいの少女に胸板を預けて、快楽に震えながらズンズンと奥を味わっていく。

「あつ！ あつ！ あつつ！ 奥つ、奥が、いいよおつ!!」

柔らかい膣奥を小刻みに愛でられて、義妹も堪らず髪を揺すつてよがりくねった。

今や愛実は、愛雄に愛でられる悦びに目覚めきつていた。大好きな義兄、新児に小刻みに膣奥を小突かれて、堪らない飲精欲求に苛まれてしまふ。

「お、おねがいいいい、つつ!! おニちゃんのせえし、いっぱい欲しいの！ おニちゃんので、いっぱいジュセイしたいのおつつ!!!」

（ああつ、また言っちゃった。愛実、恥ずかしいよおつ!!）

いくら童顔少女でも、破廉恥なことを言っている自覚はある。だが、愛しい義兄との将来を思えば、今、しっかりと子作りしておかなければいけない。

(それに……お兄ちゃんの赤ちゃんだもん。愛実、何人だつて産みたいもんっ！)

乙女心を再認識すると、膣の奥の奥、大切な受精器官が、温かい精液を飲みたくなってくる。あの、ねっとりとした濃厚な樹液で、子宮をいっぱいにして欲しい。

「ね、おニイちゃん？ 愛実を、いっぱいニンシンさせてえ……っつ!!」

うっとりとした蕩けきった眼差しでおねだりすると……発情した恋人は、感極まったようにギョッと爆乳を揉み搾ると、一度大きく腰を振り上げた。

「あ、愛実いいっつ!! 分かった、分かったよ!! 愛実のおま○こ、僕がいっぱい受精させてあげるからねっつ!!」

——っつっつドオオオオっつ!! パアアアアアアアン!!!

「はううううううっつ!!? あふっ、んああんっ!! おお、おニイちゃあああんんんっつ!!!」

力強い一撃がむっちりヒップを弾けさせ、パツと輝く汗が散った。強烈な勃起挿入に乙女の性感は灼熱させられ、激甘電撃が脳天まで突き抜けた。

「ひ、ひいいああ……!! おお、おちん、ちんっつ、と、とどくううう、っつっ!!」

(す、すごい、すごすぎるう!! お兄ちゃんのが、お、奥に、ちゅうううってええ……!!)

深々と押し入った太亀頭は、乙女の深部にねっとり吸着してくる。深い部分の官能性

感が、甘い膣欲を荒々しいくらいに燃え上がらせる。

ズンズンっズパンズパン!! 激しいスパートが桃尻に波紋を刻み、淫汁をポタポタと床に落とす。艶かしい乳房も雄の指から零れ出し、恥ずかしげもなく躍り狂う。

逞しい剛直は浅い部分から深い部分まで、大きくグラインドしながら根こそぎ肉愛撫してくる。柔らかい壁がグチュグチュとかき混ぜられて、意識がうつとりと白んでしまう。

「っっああああだめえ!! 愛実イク! イっっちゃう!! おちんちんでイっっちゃうよおおっ!!!」

もう、何が何だか分からないくらい。これほど大きな存在感が今は堪らなく気持ちよく、隅々まで舐め味わうのを止められない。

激しい抽送が肉奥を抉り、豊満な肢体を荒々しく揺さぶる。甘く、強烈なノックが、純情な胎内に雄肉の調べを響き渡らせた。

「イクっ!! イク! イクっ! おニイちゃ、イクうううううう!!」

大きな乳房が身体ごとガクガクと翻弄され、頭に気持ちよすぎる火花が散る。それでも恋人は容赦なく、立派な男の証で乙女の純膣に、逞しさと恋慕を熱く叩きこんでくれる。

(お、おとおおっ、お兄ちゃんの、赤ちゃんっつ。欲しい、よおおおお……!!)

みるみる膨らんでいく膣内勃起が、彼の愛情をビリビリと伝播してきて、心とは別に、乙女の本能までもが、熱い奔流を求めてざわめかされてしまう。

特大バストがムチムチと搾られ、乳性感が真っ赤に燃やされる。首筋を吸われれば恋心

まで征服されて、獣のように繋がりを続ける。

そして、そんな肉の旨味を味わわせる義兄少年も、徹底的に桃尻に腰打った後、自分の蜜壺にギュウウウ……と熱く締めつけられて――、

「僕もおつつ!! 僕ももうイクよ!! やっぱり中だね? 中に全部出すんだね!」

ビクンビクンと今にも弾けそうな熱勃起は、大量に射精してくれそうな気配。すると乙女の快樂が、今度は恍惚の受精欲求にすり変わってしまう。

「うっ、うん!! ぜったい中! 中に赤ちゃん、ぜんぶちようだあいつつつ!!!」

疼いて疼いて仕方ない熱子宮が、沸騰しそうなほど受精を望む。

そして、この上なく硬化したペニスが――つズシイイんつつつ!!

「ひうううううううう、くくくくつつつ!!!? お、おニイちゃ……!!!」

腫れ上がった亀頭が、とどめの一撃を放った、そのとき――、

「ううあああ、つつつ!! い、イクうう、つつつ!!」

――ビクウうう!! びゅぼつ! びゆるるるぶぼぼおおつつつ!!!

「つつつ……ああああ!!! せつ、せいし、イクつつつああああああんつつつ!!!」

熱い欲望を感じた途端、愛実の裸身がビクウウウ!! と跳ねた。と同時にゴムまりみ
たいな豊乳も弾み、パツと綺麗な汗を散らした。

(あ、熱い!!! おナカのナカ、お兄ちゃんのせえし、入ってくるうううう!!!)

焼けつくような熱精液が、ドクっ！ ドクっ！ と胎内を駆け巡っていく。その勢いはすさまじく、蕩けた子宮壁をバシヤッ！ バシヤッ！ と叩いて飛び散り、女体すべてを快樂の絶頂へと押し上げてしまう。

「う、うああああ、つつっ!! あ、愛実の中に、全部、出してるようつつっ！」
「つつっああああああ!! く、くるう！ おお、おニちゃんのが、がああ……！」

（すう、すごいよおお！ お兄ちゃんので、おナカ、いっぱいになってるう！）

毎回の食事のためか、新児の射精は本当にすごい。勢いといい量といい、すぐにも受精しそうなくらいに。

震える兄勃起からは、残りの残滓がビュッ、ビュッ、と吐き出されていく。それさえも痙攣しつつ受け止めていると、心地よい疲労感と、ポワあつとした幸福感。

「おお、あああつつ。で、でた、よ。愛実の中に、たくさん出ちゃった……！」

最後まで腰を密着させ続けてくれた、愛しい義兄少年。優しい胎内でブルルッ！ とペニスをおななかせると、後背位のまま、そつと肩を撫でてくれた。

「つつつつ！ つはああ、はあ、はあ、はああ……。うん、分かるよ。愛実のナカ、ぱんぱんになっちゃったもん……！」

ようやく波が引いていくと、今度は柔らかい液感に乙女心が蕩けてしまう。少し動くとも揺れる子宮内精液は、まさに子作りの証と思えて堪らなく恍惚とさせられる。

「んふっ。今日こそお兄ちゃんの赤ちゃん、できるといいな……！」



「愛実……まだ、分らないんじゃないかな？」

「ん。じゃあ、これからも、もつともつとえつちしないかね？」

「お、おいおい。恥ずかしいぞっ」

コツンと額をつつかれて、愛実はペロツと舌を出した。

一息ついた今は、まるでイチャつく甘々カップルのようだった。そこには官能的な気配とは異なる、歳相応の男女の睦みがあった。

が——セックスに夢中になっていた二人は、ここがどこだか忘れていた。

ガチャリ——。

「な〜に今の声？ つつって、え……へえええつつつ!!!」

「え……？」

無造作に開かれる部室の扉。蕩けた視線を向ける恋人兄妹。その先には、あんぐりと口を開けて固まっている水着姿の水泳部員が。

彼女の視線の先には、もちろん、いやらしい後背位で密着したままの自分たち。

しまった、見つかった——そういえばここは部室だった。いつまでも情事を楽しめる場所ではない！

「ご、ご、ごめんっ!! ごゆっくりいいいいいいつつ!!!」

慌てて飛び出して行ってしまふ女子部員。

「あ、待って！ ちちち、違うんだ！」

「違う？ お兄ちゃん、どおいうこと？ って、そんなコトより追わないと！」

思わずツッコもうとしたものの、思い留まって慌てて後を追う水着少女。

——結局。

部活仲間のよしみもあり、どうにか口止めには成功する二人。

だが、これには口止め料——大量のお菓子——を必要としたのだった。

さらに新児の受難は終わらない。

散々エッチしたせいで帰りが遅れてしまい、用事で遅れた美野里と鉢合わせしたのだ。

「あ、愛実!! 兄さま!! なぜこんな時間に？」

「あ、えっと……」

つい目を合わせて恥じらってしまう新児と愛実。

この意味を悟れないほど、美野里は鈍感ではなかった。

「ま、まさか愛実！ あなたも学校で!!」

「う、うん……って、え？ もしかしてお姉ちゃんも!!」

何というあきれたやり取り取りなのか。結果的にはどちらもボロを出し、互いの恥情を暴露してしまう美少女姉妹。

「なんてことっ。に、兄さま！ まだ足りないというのでしたら、わたし、もっとお相手しますからっ！」

「えっっ!! いいよおっ、愛実がシテあげるんだからっ!」

「ちよ、ちよっと二人とも!」

こうして、どちらをも焚きつけることになってしまい。

この後、新児の性生活は、さらに過激さを増していくのだった。

最後の我慢がプチンと切れて、腰がスウッと軽くなる。途端、先端が弾け、

—— つつむむつ、びゅううううつつ!!! びゅうびゅうびゆるっ!! ぐびゅぐびゅぐぶううううううつつつ!!!

「んぐう!!! つぷはっ!! んやああああああんっつ!!」

「ふああ!!! あっ、あああああああ、つつつ!!」

膨らんだ肉先から、勢いよく白い噴水が上がった。それは一瞬、童顔少女の口内を押し上げると、解き放たれてあたり一面に降り注いでしまう。

ぼたっ! ぼたぼたパタっ! と、数十センチも宙を舞った後、粘滴となつて少女たちの美顔に零れ落ちる。桃色の頬や額でさらに弾け、パシヤパシヤと飛び散っていく。

思い切り顔射された二人は、あつという間に白化粧されてしまった。だが、愛しい恋人の射精とあつては、うつとりと悦びも頭に受け止めていく彼女たち。

「はあああつつ。おニイちゃんのせえし、おカオにも出されちゃったっ」

「つつううつつ。そうね、ここまでされたんですもの、もうわたしたち、身も心もお兄ちゃんのものです」

微笑む美顔は、汚されたという意識など微塵も感じさせない。それどころか、愛雄に所有されるのを心底悦んでいる。

そして——ポニーテールとツインテールの美少女たちは、さらなる所有を哀願してきた。「では、ココにもつと……種付けしてください。お兄ちゃんのお精子で……」

ぽお……つと恍惚の笑みを浮かべると、今度は床に仰向けになり、ぱっくりとV字開脚してくる美野里。

汗だくの裸身は輝いていて、乙女の色香をより際立たせる。上を向いて隆起する胸も、興奮でますます官能的に乳首を揺らめかせていた。

スベスベの美脚とむき出しの臀部も素晴らしい。ドッシリと肉付いたそれは、いかにも出産と子作りに適した肉感美で、思わず腰を乗せたくなる誘惑。

「愛実も一緒によねがあい。おニちゃんのせえしで、愛実をママにしてえ……」
蕩けた笑顔を染めて、姉の裸体にうつ伏せに重なる愛実。こちらはいやらしく逆V字に股開いて男根を誘う。

同じく汗濡れた肌は輝き、瑞々しさを際立たせている。巨大な乳房も胸筋に吊られ、タポントポんと重く柔らかく、はち切れそうな水風船みたいに揺れていた。

差し出された臀部も煌めき、こちらも一緒ににはち切れそう。ハイレグが似合いそうな張りに富む尻肉は、思い切りピストンしたくなる誘惑。

「ふ、二人とも、そんなに僕の子供を……!!」

（ほ、欲しがってる。僕に中出しされて、妊娠したがってるっ!!）

一度は不要だと棚上げした『子作り』。しかし今、恋人で義妹な二人の少女は、恋慕と愛情から『子作り』したいと願ひ出ている。

仰向けで股を開く、ふっくらと優しい、でも豊満な肉づきの美野里のヒップ。

入り口はきゅんつと締められ、奥では肉粒が触れ合ってくる。それらは一斉に悦び躍り、タツプリと粘膜愛撫に没頭していく。

「いい！ いいよ美野里!! ああっ気持ちいい!!」

「はあっ、はあっ！ わたしもれすウ!! お兄ちゃんにセックスされて、とつても気持ちいいれすウ!!」

まるで盛りのついた動物のように生殖行為に熱狂していく美少女姉妹。少女のほうも逞しい男根に打ちこまれて、うっとりとして吊り目を細めて悦び喘ぐ。

と同時に、すぐ上に重なる愛実のヒップも一緒になって腹で打たれ、非挿入のままパンパンと音立てていた。

「あんっ！ あんあんっ！ お、おニイちゃあん、愛実にもおおお……!!」

男の腹筋で刺激された秘所も、さらに露を漏らしてもどかしげに挿入を待つ。

これに応えるべく、軽く四つんばいにさせて桃尻を捕まえると、チュッとキス。あんっ！と可愛らしく跳ねる小柄な豊満肢体。

「ああ!! もちろん愛実も一緒だよ!!」

そのまま美野里を突き揺らしながら、眼前に来させた愛実の股間に、ペニスの代わりに舌を伸ばして突きこむ。

「じゅじゅっ!! ぶちゅぶちゅゆるるっつ!!」

「いにゃあああんっつ!! おおおニイちゃあんっ、おお、おクチいいいい……!!」

いやらしく左右する恥部の奥が、雄の舌先で舐め回される。入り口の上部を舌を丸めて舐め上げると、汗濡れた桃尻がピクッ！ピクンッ！と跳ねよがらされる。

「愛実の中もすごいよ、ちゅぶっ！レロレロっつ！精子でドロドロなのにまだ欲しがってる!!」

ウネウネと蠢く髪は、波のように奥へ奥へと誘ってくる。いかにも雄肉を欲しがって、ふやけそうなほど精液混じりの愛液を滴らせる。

舌でもピストンで媚肉を味わう少年。独特の甘酸っぱさが味覚を痺れさせ、ゾクゾクつ！と腰がわなないてしまう。

「あああああんっつ!!! お兄ちゃんのおペニスウ、ビクビクしてますウ!! いっぱい動いてますウ!!」

「うううううっつ!! 気持ちいいっ! こっちも絡みつくうっつ!!」

勃起圧が増したためか、美野里の媚腔もますますキツく締めつけて、さらに気持ちよく摩擦してくれる。精液まみれの膣内は、グチュグチュと淫猥な音まで立てていた。

妹と重なったまま正常位で激しく淫打される彼女は、白い背中をうっとりときくねらせて悶え悦ぶ。ふっくらDカップも淫らに揺らされ、綺麗な桜色はぷっくりと膨らんでしまっている。

眼前には四つんばいの愛実のヒップ。腰前には仰向けの美野里のラビア。まさに快感と誘惑のただ中で陶酔する少年。柔らかな秘肉を舐め味わい、さらに荒々しくペニスを送り



こんでいく。

——じゅぼっ！ じゅぼっ！ にゅぼっ！ ぬぼぼっ！

「あひっ！！ あひっ！！ あひっ！！ あひっ！！ あひっ！！ おおおくにい、キスしてくらさい……おぺニスでえ……！」

ポニーテールが悩ましく覗きこみ、熱い眼差しで接吻せつぶんをお願いしてくる。涙と唾液と精液で濡れた顔もまた格別で、新児は立派な亀頭でキスをした。

——ずぬぬうつつつ——チュっ。

「んふううああああん!!! いいつれすウ!! おくつ、子宮っ、キスされてますウウ!!!」

やはり受精欲に沸き立つ最奥は、また別格の快感があるようだ。グツと押しこんで密着したまま何度もプッシュしてやると、コリッとした入り口がピクピク喘ぐのが分かる。

「いいれす!! そこらいすきれすウ!! お兄ちゃんに一番おくウ、愛されてますウウつつ!!!」

「うんっ!! 愛してるよ、一番奥も愛してるよ!! 僕のおちんちんは二人だけのものだよ!!」

膣奥深くを楽しんだ義兄は、そこでいったん美野里から引き抜いた。そして素早く狙いを変える、今度は上の愛実の秘孔に雄々しい肉棒を埋めこんでいく。

——ずぶぶつつ、クチュクチュずりゅうう……つつ!

「あああああクルう!!! おニイちゃんのおちんち……おつきいおちんちんんつつつ!!!」

小さな縦筋がむっちり割られて長い肉根が押し入る。処女のような狭い入り口は、しかし心地よい締めつけで勃起を楽しませてくれる。

「うう気持ちいいっ!! 愛実の中っ、全部埋めちゃうよおっっ!!」

姉とはまた多少異なる気持ちいい胎内。入り口こそキツいものの、奥のほうは柔らかい肉壁でいっぱい、サオ全体に満遍なく絡みついてくれた。

「はあっ、はあっ! う、動いておニイちゃあん、いっぱい、ばんばんしてええ……!!」

「もちろんだよ! 愛実にもいっぱいおちんちんシテあげるっっ!!」

——ぢゅぷうう! ぢゅぷぢゅぷグイっ! グイっ! ぱちゅんぱちゅんっっ!!

「んきやあううんっっ!!! オナカ、オナカくるよおおおんんっっ!!!」

間もなく始まった力強い抽送に、ガクガクと感じさせられる爆乳義妹。恋人少年の勃起は三度の射精にもめげず、強烈な存在感で乙女の胎内を狂喜乱舞させてしまう。

柔らかい肉奥がねっとりとかき混ぜられ、カリの形を隅々まで教えこまれていく。が、すでに開発の進んだ肉壁は男根の形によく馴染み、ピットリと表面に吸いついた。

「やあ、柔らかい、やわらかいよお……!! おちんちん、溶けちゃいそうだよおっっ!!」

その柔肉感をカリいっぱいに伝えられて、少年の腰がぶるるっ! と震わされる。元氣印の美少女の胎内は、驚くほどのふんわり媚腔で雄の性器をジリジリと痺れさせてくる。

——ぢゅぶっぢゅぶっぢゅぶりぢゅぶりっっ!!

ゼリーののような蜜肉に心地よく搾られながら、力強く快楽を貪っていく肉勃起。そして

姉同様、出入りを繰り返して肉壁をこすり、ザラつく子宮口にぷちゅりと口づけする。

「きひい!? きもひいいいいつつ!! おニイひゃんにあかひゃん作ってもらうの、いひよおおお……!!!」

蕩けた肉奥を責め味わわれて呂律も回らないほど悦ぶ愛実。可憐な童顔に女の色香を張りつかせ、姉の真上で淫らにくねり悦ぶ。

そして悦楽に弛緩し、くたりと姉に身を任せると、愛兄に手を伸ばされ、たっぷりとGカップを揉まれ始める。

「いひい、いひのおおお、ひゃんっ!! 愛実のおっぱい、もみもみしてええええ……!!!」
「はあはあっ! 愛実の身体、気持ちいいっ!! おっぱいもおま○こもすごい柔らかくて、堪えないっ!!」

上から抱きつくように崩れた爆乳は、下の美乳にぼよんぼよんと重なりあう。若い乳肉が段になり、艶かしいカガミ餅を魅せてくれた。

これをいいことに、Gの巨肉とDの美肉を同時に揉み味わう抽送少年。横に膨らむ柔らかな感触は掌に吸いついて大変興奮させてくれる。

そのままビシビシと腰を打ち、二人同時に責め味わう熱狂少年。柔らかさと暖かさ、甘く絡みつく感触の違いを交互に楽しみながら、ビリビリと勃起が痺れていく。

愛実を後背位で責め、美野里を正常位で感じる。何度も腰の位置を変えては、淫らすぎるセックスに心酔する。

「うっくうう……っ!!」

二重瞳感は快楽を休ませず、みるみるうちに熱塊がこみ上げてくる。必死にリキんで堪えるも、限界はもう見えてきている。

このまま思う様果ててしまいたい、まだ愛しい彼女たちをイカせていない。子種を注ぐのはその後だ。

（そうさ！ 僕の恋人は美野里と愛実の二人!! だから……二人とも平等に妊娠させる!!!）

卒業など待つていられない。このまま徹底的に膣内射精を繰り返して、二人の子宮を自分だけのものにしたいたい!!

そんな愛情と独占欲に駆り立てられて、恋人たちを責める腰つきが、さらにさらに加速していく。

——ずぼおっつ！ グツグチュジュプるりりっつっ!!
「ひいひいひいんっつ!!! おペニス擦れますウウウ!!!」

順番が来ると、すぐにも美野里は嬌声を響かせた。熱い肉奥を亀頭で探ると、疼く肉壁は隙間なくきゅんっ！ と締めつけてくる。仰向けの大股はなおも開脚度を広げ、恋人兄の腰をうっつとりと挟みこむように動く。

悩ましい瞳には悦びの涙が溢れ、ポニーテールは汗に輝き艶かしい。重なる乳房は脇から零れ落ち、ピストンに合わせて柔らかに前後している。

そして安産型の豊満尻肉は、逞しい雄腰に情熱的に弾かれて、妖しく悩ましく輝き悶えていた。

「美野里、美野里いつ!! 愛してる、愛してるよおっ!!」

「はっはいイイつつ!!! 美野里も愛してますウお兄ちゃあんんつつ!!!」

愛を囁きながら、何度となく繰り返し媚肉をこすり上げる。何度も何度も粘膜の抱擁を感じあい、熱い恋慕を子宮の奥にまで伝えていく。

もちろんそれは愛実も同じで、しっかりと奥の子宮を揺すってあげた後、交代して上の桃尻にも突きこんであげる。

——ずぶちゆうっ! ぢゅぶつぢゅぶつズちゅぷふるんつつ!!

「つつあひゃうつつやああんんつつ!! オナカっ、おくっ! シキユウくるよおおつつ!!!」

柔らかい蜜壺を残さず自分型にしてから、さらに子宮全体をキユムっ! キユムっ! と押し上げる。疼く胎内を丸ごと揺すり、女の受精欲を再び燃焼させていく。

「愛実、愛実いつ!! 愛してるよ!! 愛実の子宮、僕と赤ちゃんだけのものだよつつ!!!」
「きゃんんんっ!! つつうんんんっ!! 愛実っ、おニイちゃんのものだよ! おニイちゃんだけのニンシンいもうとだよつつ!!!」

同様の愛言を向けられて、感激と愉悅にはまりこむツインテール少女。涙を浮かべて雄々しく繋がられ、乙女の幸せを膾いっばいで表現してくれる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依鐘】



全国書店で
好評
発売中

「…藤田君は責任取るべき」
陸月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪乃】



宇宙海賊学園ブラッククィーン

【小説：Kythosus / 挿絵：ごまちゃん】

全国書店で
好評
発売中

生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!
海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?



既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獣学園戦姫ノブナガリ ①～③
- 坂田唯らいっしゅ【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエレル

- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて語る愚者の夜

- ビルグリムメイドン ①～②
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 殉魔!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせは、
メールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic-alkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!